

# I 気に関する複合語の習熟から みた小学生の気の働きについて

(付) 教科書における気の用語  
の採択とその問題点

小泉節子

## 目的

国語教育を行うに当って、子どもたち自身の気の発達と無関係であろう筈もなく、気の発達に何らかの形で参加している面がなければならぬ。ところが、今までの国語教育に、そういう事と不可欠あるいは、そのこととの関係を論じられたものを見聞しない。我々が少くとも、国語科で、言葉を扱う以上、その発動としての気の発達をおさえ、それとの関係で言葉を指導すべきものでは、なかったろうか。子ども達は、いかに気が働くか。そしてそれをどれ程ことばにすることが出来るか、ということは、どの程度意識化して使うことができているかを、この調査の目的としたのである。そして、今後の国語教育は、このデーターをもとにして、言語以前の気の発達の助長や気の刺激を行うことが出来ればと思う。

## 方法

我々はどこかひとつの所を取り上げて、それを掘り下げていく、という部分的な追求でなくて、まず必要なのは、人間と気とのかかわり合いという、全体像が、まず得られなければならない。その方法として、気とかがわり合いのある言葉を、子どもたちに出させ、それを分類、体系化した。

そこに子どもたちの意識の集中するところ、意識の集まり方を見出してみたい。

## 調査事例の概説

### ○調査の提示と方法

口頭によって、担任から次の通り指示した。「言うということばに、かえすということばをつけると、『言いかえす』ということばが出来ますね。(これで言うの複合語を出させた後) 気ということばの下にも、なにかことばをつけて、ことばを作って下さい。知っているだけ書いて下さい。」

### ○調査対象

二年	東京・四谷第一小	20名
	東京・町田南四小	41名
三年	東京・町田藤の台小	35名
	横浜・大正小	43名
	東京・町田第四小	36名
四年	東京・港南小	42名
	東京・玉川学園小	74名
五年	横浜・大正小	43名
	東京・玉川小	37名
六年	横浜・大生小	39名
	横浜・芹ヶ谷小	40名
	東京・玉川小	31名

(一年生は問題の意味が理解できないので省いた。)

○実施年月日 昭和四十九年四月～七月

まず集録した全ての語を、我々の分類ののちとって、あげた表が、表1である。

### (分類方法)

分類語彙表(国立国語研究所編)を参考にして、体・用・相の三種類に分けてみた。但し分類語彙表に記載されている気に関する語は、全部で五十一語という少なさで、しかも私たちが今回調査した語の中で、最も割合の少ない名詞化された形が、全てである。従って一応、分類の基準の参考にはしてみたが、相違がある。その特徴を示すと、語彙表の方は、原因でことばを考えているのか結果でことばをとるのか不明な点がある。たとえば「気がね」という語に關していえば、「気がね」というのは、分類語彙表で、体にはいっているが、「気がね」の意味内容から考えれば、気に関する躊躇の状態の指摘といって、いいだろう。それから考えると相になる。意味内容でなく、その状態をひとつの対象化したものとして結果で考えるとき、当然、それは語彙表の分類通り体となる。しかしこのように解釈するとしても、「気まま」という語は反対に相に入れている。これは分類語彙表が結果を先にするか、原因を先にするか少し基準にずれを感じさせるところである。従って我々の分類は両方の解釈が成り立つものは、

益

★印 類似語のある語句、類似語は紙面の都合により、割愛する。

○印 教科書の中に出てくる気の複合語、学年の所の○印は、その学年の教科書に出ていふということ。

一方を捨てることをしないで、体と相、両方にいれた。

○分類基準と用例

体は気を対象化してとらえようとしているもの。用は、気を働きとしてとらえるもの。相は気を姿でとらえようとしているもの。と三つに分けて考えてみた。そして各々を、さらに細分類してみた。

体―①名辞的用法：気を対象化するもの

(「気がね」)

②評価的用法―人の評価基準となっているもの、気の質をいうことのためであろう。

(「気よわ」「気がよわい」)

注(「気よわ」が名辞的用法であることは、いうまでもない。従って名辞的用法のある語は評価的用法を含むといえる)

用①使途―気そのものの意識的作用化(「気遣い」)

注(この語などが既述の如く、分類語彙表では「体」に入れられている。名辞的用法とも認められるからである。しかし、われわれの目的からでは、これを、もし、体に入れ用から除くとすれば、気の発達を見るということから遠ざかってしまうので、このような扱いを

するのである。)

②処置―気分の転換

(「気ばらし」)

③作用・働き―気の働きを把える。

(「気がきく」)

相①所有の在り方―気のもちようをあらわす。

(「気を失う」)

②自覚の在り方―気の動いている状態の自意識化を、言い表わそうとする。

(「気がとがめる」)

③状態の指摘―気色を表わす。外からみて気の状態を指摘する。

(「気ぜわしい」)

以上のように分類した結果が表1である。(類似語は語数だけ欄外に記載した。)表1の分類結果を種類別語数として示したものが表2である。全部で三二六語、但、類似語があるので、それは( )の中に書き、グラフでは点線で示すことにした。

表2でわかるように気は状態を把えようとしている相が全体の半分を占め、語数は類似語も含めて(カッコの中は類似語の数である)一五八(七一)用は一一三語(三八)、体は五五(一一)で、用は全体の $\frac{1}{2}$ 、体は $\frac{1}{3}$ である。全体的傾向から考えると、気は相↓用↓体の順に習得されていくように思う。気をようすで把えるのが人間にとって、

表2-B (全体を、100%と、みたとき、それぞれの分類語数の割合を棒グラフで示す。)

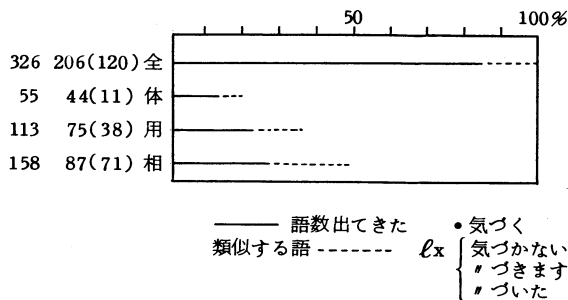
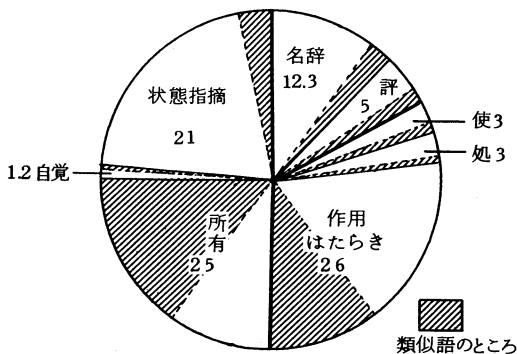
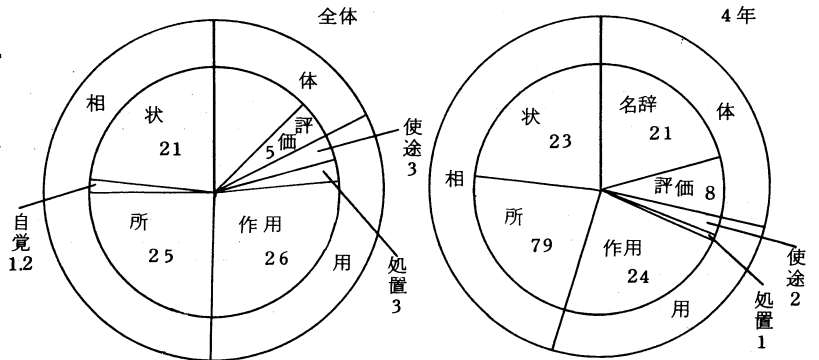
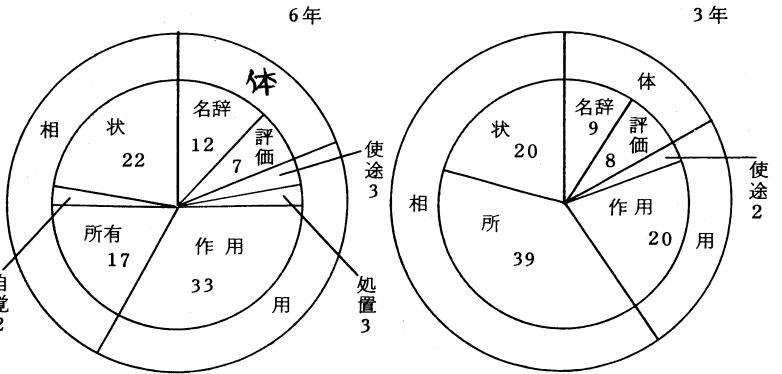
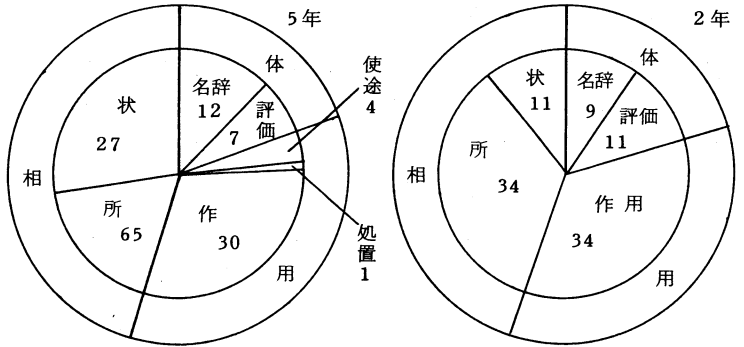


表2-A (語数の)分類別、全体のグラフ



一番たやすく、そしてそれを対象化するなわち、客観的に把えることが一番困難であるように思う。それは、気そのものの持っている特質からいえるのではないだろうか。「気は機なり」という古人の言もある。相手に対処する対し方が気であり、外的事象に反応する時、気は発動するの謂なのであろう。だからその反応状態を指摘する相が一番多いのも、もっともだと考えられる。しかし、中の内容を細かくわけて考えてみると、全体の円グラフ(表2-A)から、類似語を捨てた時の語数順位は、次のようになる。状態の指摘(相)↓作用・働き(用)↓所有の在り方(相)↓名辞的用法(体)↓評価基準(体)↓使途(用)↓処置(用)↓自覚の在り方(相)必ずしも、相の部類にはなかったものが、%が高いとは考えられないのである。評価基準の所までは、今までいっていた考え方で、考えつくが、その後、使途、処置、自覚が問題である。使途は三年から出はじめ、処置は四年から出はじめ、自覚は六年になって、はじめて出てくるコトバである。ということは、使途で、気を使うという意識が出来はじめ、処置は気をつかうことにより、次の段階の気の転換を意識して行う、ということなのか。気の自覚は、感情的な停滞を意味するので、その次の段階を意味するのではないだ

表3 各学年別に分類した円グラフ



ろうか。これを、さらに考えるに当り、各学年ごと、分類別の円グラフを作成した。これが表3である。このグラフと、各学年の特徴用語を追、学年別の段階を考えていこうと思う。

○ 学年別・気と意識とのかかわり合い方

表1より、各学年の多い語を並べ

てみると、次の様になる。

二年 4語

気をつける 75%

気になる 68%

気がいい 41%

気がくるう 31%

三年 3語

気がつく 62%

気になる 51%

気がある 35%

気がつく 62%

気になる 51%

気にする 34%

五年 5語

気をつける 80%

気がつく 53%

気にする 36%

気があう 33%

気になる 31%

六年 3語

気にする 60%

気になる 51%

気がつく 30%

これから次のような特徴があるといえる。気がいい・気がくるう(二年生) ↓ 気がちる(三年生) ↓ 気があう(五年生)と、次々、その学年特有の特徴がみられる。ここでは、二・三・五年が30%以上の比率で、特色が出てきたが、学年別・分類円グラフ(表3)等を参考にして、各学年の特色を見ていきたいと思う。

◇ 二年生の特徴

二年生に特に多い語は、「気がいい」「気がくるう」である。これは「気がくるう」「気がいい」ということを意識しているのではなく、その子自身がその状態におかれているときの言葉である。つまり、全く気そのものを意識化することがないというのが、特色であるように思う。円グラフ(表3)を見ると、分類別にわかれていても、その項目には、気の意識づけがとりわけて行なわれている語は少ない。ちなみに気を対象化していると考えられる体の所を参照してみると、「(気がつよい

6・「気がよわい8」と、他学年より高い割合が出ている。がしかし、「気がいい」「気がくるう」の割合の高さからすると、二年生の「気がつよい・よわい」というのは、高学年のそれと同じ意味を持つとは考えられない。自分自身が、自分自身の中に没頭して、得られた語のように考える。他の項目の語も、そのように考えて、よいのではないかと思う。

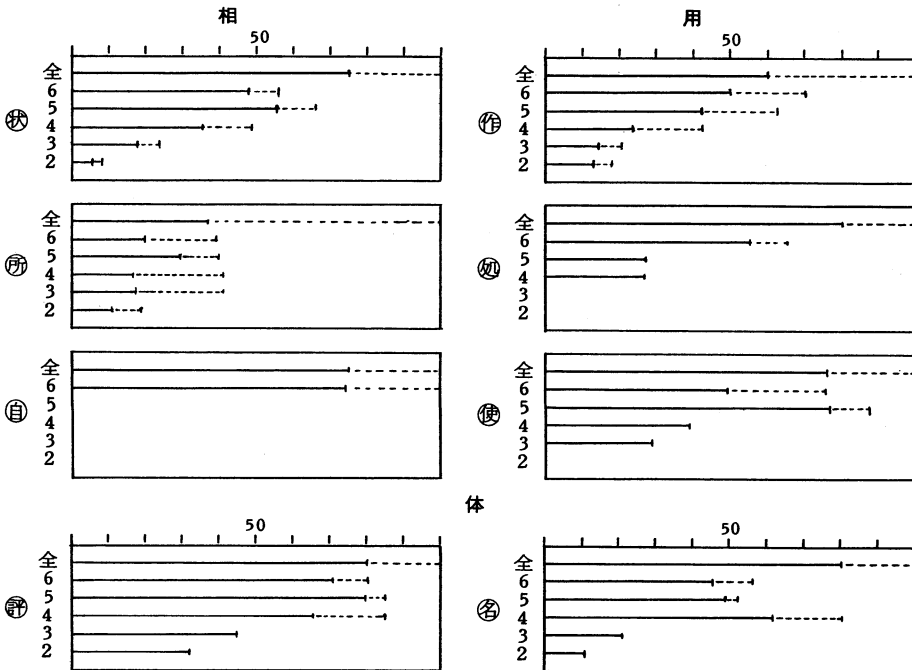
#### ◇三年生の特徴

三年生の特徴は、二年と同じく気の使い方において、まだ意識的とはいえない。しかし二年では見られなかった他の方面に向って気のアンテナが動きつつあることが認められる。「気がちる」35％とか、「気にさわる」20％等の語が示され、気の不安状態を獲得してきている。おちつかず、絶えずアンテナが動く。これは二年生の全く自分自身の中に没頭している状態からの脱却ということが、考えられる。円グラフ(表3)の方を見ると、三年から使途が出はじめてきて、その多は、三年(1)・四年(2)・五年(4)・六年(3)と多少、全体で占める割合は増してくる。先に使途のところで述べたが、五年生が、その頂点にあるが、「気がつかう」に関しては三年生は(「気がまわる」3％「気をつかう」21％)と二語にもかかわらず、最高を示している。

#### ◇四年生の特徴

四年生は特別名の高い語は見あたらなかったが、表3の円グラフの特徴を見ると、他の学年は体の名辞と評価が相変らず全体的に少なく、多も同じ位を示しているにもかかわらず、四年生の所で、その割合が広がる。他の項でも、述べるが、四年だけの語を拾っても他の項目に比べ、四年生は名辞的な用法の語が多い。ということは、四年生で、ひとつの転機を迎えるとしてよいのではないか。今まで、気を無意識に感じていた時点から、意識化できにくる。ということである。物事を対象化して考えることが出来るようになる。ただひとつ並行して考えていくと、評価の語の割合が四年生は、「気軽」を除いては全部最低の割合である。(「気がつよい」5・「気がよわい」3・「気がながい」3・「気がみじかい」3)ということとは、四年の評価の内容に二年三年から変化があるというのは憶測にすぎないだろうか。つまり評価する事自体、相手に意識が向くようになってきた。相手を意識してものを言っているとしては、おかしいだろうか。二・三年のそれは、単に気の強さ弱さの中に自分の身を置いてしまっているの気であり、その中から、気を対象化して見とっているとは考えられない。つまり他人に対する評価ではなく、自分自身の気が強くなったり、弱くなったり

表4 分類別、棒グラフ



しているのを肌で感じている状態なのであり、肌のぬくもりが感じられているうちは、自分自身の意識の問題に置きかわらないということである。それ

がひとたび意識すると、とたんに今までのような言い方ができなくなり、評価の割合を低下せしめたのではないかと、表4の分類別にした各学年の語数の

分類別に、学年の傾向比較

ところを見ても、体の名辞的用法は四年が一番多く次に五年・六年・三年・二年の順になっている。四年・五年あたりが一番名辞的用法に執着する段階だといえる。

#### ◇五年生の特徴

五年生は先程述べたように使途が、他学年よりも増える。その好例が、

「気がまわる」「気をまわす」。「気がまわる」は（六年1・五年1・三年3）と三年生が%が高いが、「気をまわす」になると、（六年5・五年13）と五年生がとたんに優位を示す。「気がまわる」は回わっている気に気づかず無意識的で、「気をまわす」は気に意識的とならなければ出てこない語である。但し同じ意識的とならざるを得ない、「気をくばる」（六年14・五年1）

となると断然六年生の方が圧倒的なものももしろい。同じ意識的気の動きといえども、五年は意識化の習い始めであることにおいて、鋭角的であり、部分的であるということである。用の中でも、この五年の特徴を裏付けるものがある。「気をかえる」（五年5）「気がかわる」（六年12・五年6・四年9・三年9・二年11）「気をなおす」（六年5・五年13・四年3・三年1・二年3）と高い、感情面では、一番%の高い「気が合う」<sup>33</sup>が考えられるが、これも背景に、「気にいる」（五年26・

四年17）・「気をひく」（六年0.9・五年3）「気を合わせる」（六年0.9・五年3）と、さかんに気を働かせることに努力している。人間はこの時期、生涯で最初の友人を得るといのが、このようなところにも、それがあらわれている。これらのことは、知的発達及び体位の成長とも密接に関係してくるものでもあろう。たとえば、女子の体の変化も、ちょうど五年生を境にして始まる。体の変化に伴う、精神的感情面の起伏のはげしさが解決を迫る。五年生において、使途が処置を上まわる結果となるのも、見逃せないこの時期の発達上のポイントであるだろう。処置の語でただひとつ五年にだけ出てきた語がある。それは「気をはらす」<sup>(1)</sup>で、これは「気がはれる」（六年14・五年3）と比べて、知識の動きを感じさせる語であり、かなり感情面に苦悩のあるように思えるのは現場の身びいきにすぎる見方であらうか。

#### ◇六年生の特徴

六年生に至ると使途と処置は同%となる。使途と処置が同%になる段階ではじめて、<sup>34</sup>「自覚」に分類されるものが出てくるのも注目にあたいしよう。表1よりこの部分を、クローズ・アップすると、次のようになる。

使途	五年		六年
	気がつかう	16%	10%
処置	気をまわす	13%	5%
	気をくばる	1%	14%
自覚	気がはらす	1%	14%
	気がはれる	3%	14%
自覚	気がとがめる	1%	1%
	気がひける	4%	4%
自覚	気がもめる	10%	10%

作用の語を五年だけしか出ない語と、六年だけしか出ない語を比較してみると、

五年だけの語  
「気をもむ」  
「気をもます」  
（6%）  
（0.9%）

五年だけの語  
「気をかえる」  
「気をまぎらわす」  
（5%）  
（0.9%）

五年だけの語  
「気がはる」  
「気をそむける」  
（5%）  
（0.9%）

五年だけの語  
「気がうつる」  
（1%）

五年だけの語  
「気がうたがう」  
（0.9%）

五年だけの語  
「気がたかぶる」  
（0.9%）

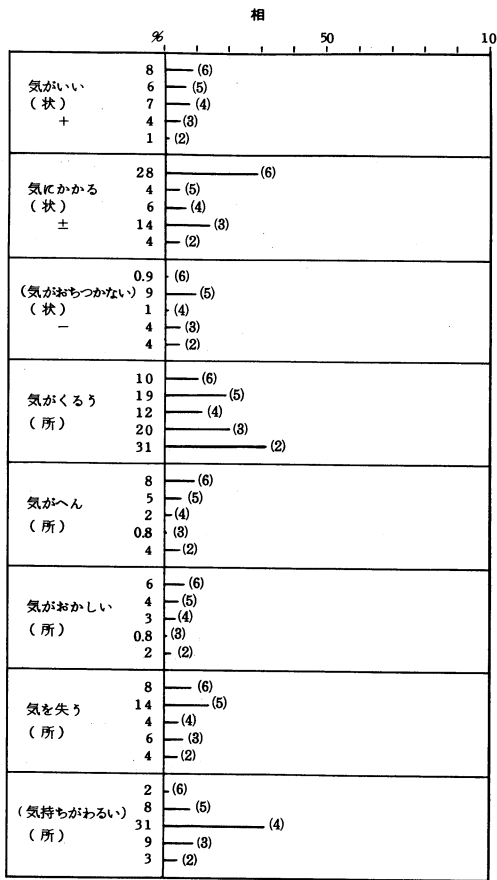
五年だけの語  
（5%）  
（0.9%）

となる。比べてみると、六年生の方に余裕が見られる。例をもってしても、

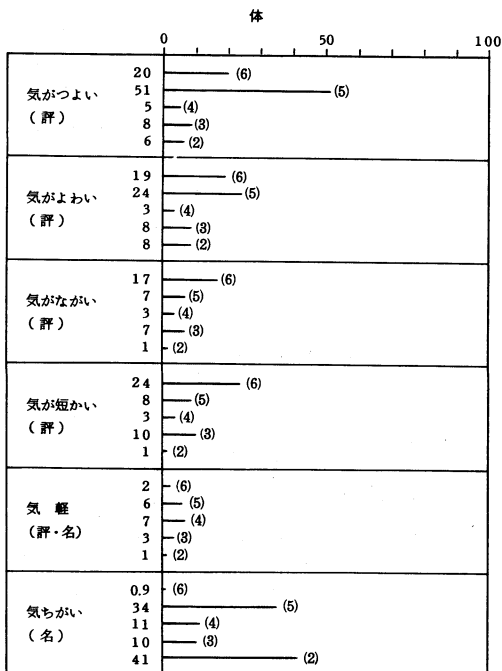
「気をもむ」のが五年で、「気をもませる」のが六年生なのも、この辺が相対的に気のゆとりの差異となるものであろう。感情を自分自身コントロールの出来るか否かの発達段階であることが、よくわかるし、徐々に、感情的なものへの理解が深まってきている。

学年ごとに気に対する姿勢（われわれはこれを構えと呼んでいる）のようなのものが窺えるように思う。まず二年では全く気の中に没頭し、気の存在すら気づかない。構えのない状態から三年になると気が外的に對し反応しはじめ、その反応に視点が固定しないから、なおはげしく変化する。子どもたちの活動が一段と活発になる時期である。

次に外に對する反応が定まらぬ視点ながらも、抬頭して来る。また氣遣いに對しても、氣遣うことにわずかに気づきはじめ、外的なものとの交渉を知る構えが生まれる。これが三年から四年にかけてと見る。四年になると、外的なものに對する意識づけを行う時期であり、外的なものをはっきり対象化しようとする。つまり、客観的な構えを伴っている。五年生になると、この客観的な見方に知的要素が加わり、心情的な揺れ動きを気を働かせることにより、対処しようとする過渡期と見たい。それだけに絶えず、目的意識が先行したバランスの崩れを見せるのも、この



( ) は類似語。

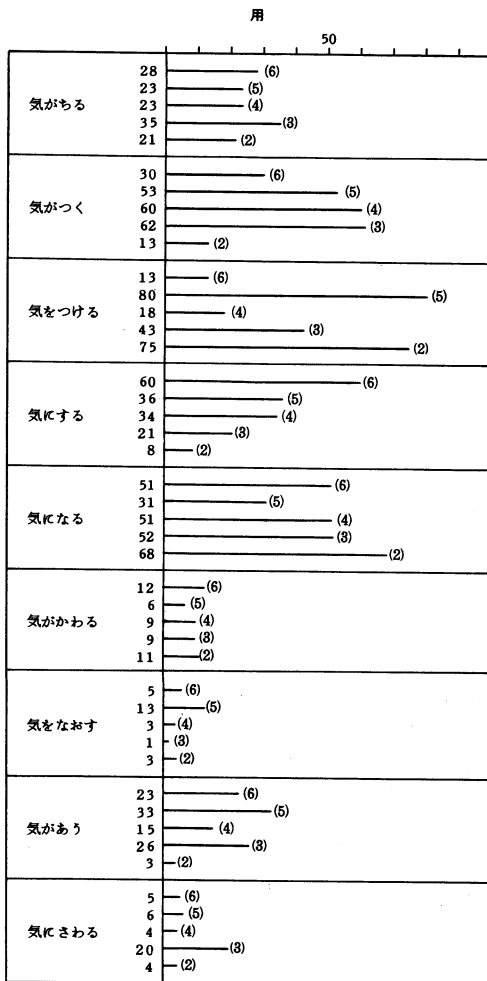


学年である。六年になると感情を流すことを覚え、感情処理がある程度出来ている。つまりいわゆる心情的となり、一般的状況把握が妥当して来る。

△名の高い語について▽

気に関する語は、言うの複合語と比べて、これだけは必ずこの学年だけ出るという特徴的なものはなく、全体(二年～六年)で出ているものは、特に順位とか、発達とかを感じさせぬような気ままな出方をしている。二年～六年まで、全学年が名を示している、グラフは、表うに示す。しかし、この気ままな出方が、また本来人間と気とのかかわりだと考えねばならない。従

表 5



ってこの気ままな気の出方を考察し、その気ままさに気の動き方を把握せねばならない。「気がつく」「気をつける」「気にする」「気になる」の四語が50%を超えるものとして、ランクされているが、特にどの語が更にとりわけ高い%を示すという学年等も見当らない。しかしこの四例を更に考えてみると「気がつく」は五年・四年・三年に高く、「気をつける」は二年と、五年に%が高い。ということは二年の「気をつける」と、五年のそれと、同じに扱うことは、出来ないのが常識である。グラフの上では、二年生は「気をつける」は高く、「気がつく」は低い。五年生は両方ともある程度の%を出しているということ指摘することができる。「気がつく」「気をつける」とを見比べて二年生などは、気がつかないから、気をつけねばならないし、五年生などは気がつくから、気をつけなくてもいいのちがあるように思われる。三・四年生はその過渡期で徐々に二年生的な「気をつける」が減少し、「気がつく」へ移行するのである。二年生までの他律的なものから自律的なものへの成長とみたい。五年生で再び「気をつける」が増すのは、気が意識的関心事になってきたのちがいない。ところが、六年生で、また「気をつける」が減るのは、気の意識

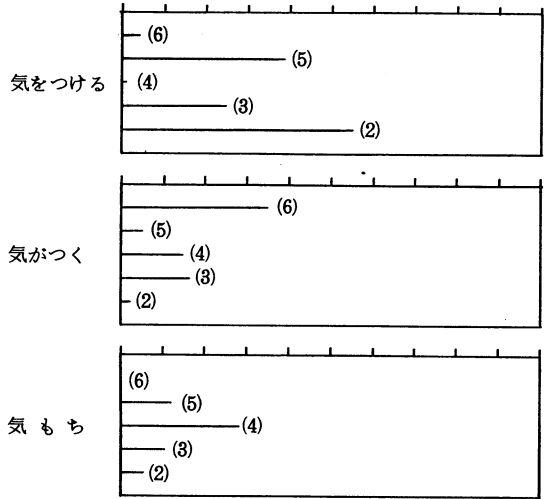
化と気の発動性とは交互に相剋するものなのであろうか。  
「気になる」「気にする」が全く正反対のグラフであることを考えてみる。両者はともに不安定な感情処理における気の作用と言えるが、両者各々の対象を考えてみると、「気になる」の方は大きく「気にする」の方は小さい。それだけに「気になる」の場合は、気が外的対象に注がれ、「気にする」の場合は気それ自身が内に対象をとり込むことによって起る。ということは「気になる」は徐々に外的対象が気を圧倒する感じであるのに比べ「気にする」はまたしても気をさわがせるものという区別がつけられる。それだけに「気になる」は対象中心の自然的意識であり、「気にする」は自己中心の自省的意識といえよう。だから、「気になる」の方が低学年に多く、「気にする」の方が徐々に六年生に近づくにつれ、増していくのはうなづける。今ひとつ言えることは「気になる」精神作用を他者が見破った際は「彼は気にしている」と観察し包摂した言い方をするのが常である。勿論自分で自分が気にしていることを「気にする」と把握られないことはない。だが、気になりはしても、気になっている時はその対象に気を奪われるから、気を奪われている自分の気を気にすることはむずか

しいことを、物語っている。つまり「気にする」はその気働きを包摂する見地を必要としない限り発語されるものではないと考えられる。表5のグラフの特徴でいえば、二年生は盛んに「気になっている」から先述の通り「気をつけよう」、「気をつける」と思っている。しかし気働きとしての「気にする」意識的発動に至らない。五年生では自律的に「気をつける」ことが出来、またはやわわっているから、気を奪われることは減る。つまり「気をつけている」から「気にならない」のが五年生であるといえようか。自分自身の気働きとして「気にする」が伺える。  
△同型のグラフについて▽  
同型のグラフの目立つのは、評価の中の気である。「気がつよい」・「気がよわい」と「気がながい」・「気がみじかい」である。これらは気を考えるとき、特に人間(性格・性質)の基準評価が意識されている場合だといえる。それだから、「つよい」「よわい」、「ながい」・「みじかい」は、それぞれ同じ%で、(+)(-)の方向だからちがいない。気を力関係として把握されるとき、つよい・よわいということと物事を考えるし、時間の方の(+)(-)から言っ、ながい・みじかいと子どもたちは考えているのだということが、あた

り前のことながら、このグラフを見てもう一度再認識させられた。  
こういう語に対し、意識するところが同じだということは、うなづけるが、学年別に考えると四年生がどの語もへこむ。これは四年生の特徴のところでも述べたが、四年生は名辭的用法が増し、名詞化の傾向が強いという裏付けとして、そろそろ気がひとつの意識の在り方ということに気づきはじめている段階であるので、かえって二・三年よりは%が低くなるということなのであろう。こう考えてくると五・六年生はこれより伸びているが、「気が強い、弱い」では五年生が六年生を上まわることが「気が長い・短い」では六年生が五年生をしのぐのも、おもしろい結果と思う。つまり「気が強い」「気が弱い」と「気が長い」「気が短い」とを較べてみると、同じ人物(性格・性質)評価であっても、前者よりも後者の方が、より包括的視点であるためではないかと思われるからである。  
「長短」という落し癖があるが、そのまくらにあった「気の長短」という言葉が子ども心に捉えにくかったことが思い合わされる。  
△初出語について▽  
最後に初出語について触れておきたいと思う。初めに出した言葉を調べたねらいは、気に関する意識が無理なく



表 6 多いと思われる語のグラフ (初出語)



一覧表

第一位		全部で18語
6年	気がつく (34%)	23語
5年	気をつける (37.5%)	26語
4年	気もち (28%)	24語
3年	気をつける (24%)	16語
2年	気をつける (55%)	

集中されているところを知りたいからであった。結果は表6を参照されたい。表6のグラフは先に示した表5 (50%以上の語) の「気をつける」「気がつく」のグラフと、ほとんど%が変わらない。ということは、まず初めに思い浮ぶ気というのは、気の作用 (働き) が直観されていることである。この論文のはじめには気を姿としてとらえる相が一番多いと書いていながら、矛盾するようではあるが、姿としてとらえようとしている相はその種類としての数が多いが%は低く散っている。結局頻度数50%以上の語は四語とも作用に属する語である。これらの四語から考えてみても、初出語の語句に子どもたちの気に対するなまの感覚が出ている

ように思う。言葉で教えられる以前に子どもたちが、どこかでかきつけている直観が、はからずもここに出たということなのだろう。特に「気をつける」と「気がつく」は気の意識化と発動性の二面をいう語である。気は意識よりも先に動く。そして意識化することにより、また次の発動への手がかりとなっていく。50%以上の語について述べたことが、初出語において更に裏付けできたように思う。それぞれの学年の初出語の数をみると、二年16語・三年24語・四年26語・五年23語・六年18語という結果で、気をまず、思い浮べる範囲はどの学年も大同小異ということを示しているものと思える。

## (付録)教科書における気の

### 用語の採択とその問題点

#### 1. 語数について

学年別・出版社別語数をあげると次の通りになった。( )の中はその使用回数を示している。これを見ると同じ語が何度も使われているということになる。また、それだけに、気に関する

語彙の小ささも今後の問題点であろう。ちなみに児童から出た語は類似語を含まずに二〇六語、教科書にある語は六三語である。これでは気の発達は教科書で学ぶ以前に、児童の自然発達が先行しているといわねばならない。

語数 (学年別、社別 語数) ( )の中は使用回数

	光村	教出	日書	東書	学図	全
1	1(5)	2(3)	0(0)	3(10)	2(7)	
2	3(16)	4(15)	5(15)	3(8)	4(11)	
3	5(12)	7(15)	2(21)	5(21)	6(23)	
4	8(34)	9(50)	9(42)	8(29)	10(36)	
5	15(66)	15(62)	9(47)	12(55)	17(49)	
6	18(46)	19(53)	18(45)	14(50)	16(65)	
	31(179)	32(198)	25(170)	24(173)	29(181)	63語

#### 2. 体・用・相別の採択語数について

児童調査の結果その採択語数のひらがりは相↓用↓体の順である。各社教科書のうち、これと同傾向にあるのは光村のみであるが、五社全部合わせると、おもしろいことには、その採択語

○	光	教	日	東	学	全
相	13	13	12	12	12	20
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
用	10	12	(8)	(9)	(9)	20
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
体	(8)	(7)	(5)	(3)	(8)	14

